



Title	ジョルジ・ジ・リーマの『黒人詩集』における“隣接する視点”
Author(s)	菊池, 豪人
Citation	Anais : Colóquio de Estudos Luso-Brasileiros. 2025, 51, p. 33-48
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/103344">https://hdl.handle.net/11094/103344</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# ジョルジ・ジ・リーマの『黒人詩集』における “隣接する視点”

菊池豪人

## 1. はじめに

ブラジルの詩人ジョルジ・ジ・リーマ (Jorge de Lima, 1893-1953) の『黒人詩集』(Poemas negros, 1947) は、その黒人描写が黒人文学研究の分野で度々批判されてきた。本稿は特に1篇の収録作に焦点を当て、従来の批判的評価とは異なる観点で同詩集について考察する。

白人とされる<sup>1</sup>詩人リーマは、アラゴアス州の砂糖農園主の子息として生まれ、黒人に囲まれ育ったという<sup>2</sup>。1920から40年代にかけて南東部のサンパウロを中心としたモルニズムの影響を受け、自由詩や口語体による前衛的な創作スタイルを確立した。同時期にヘシーフェで展開した北東部地域主義 (regionalismo nordestino)<sup>3</sup>にも接し、地域の伝統的かつ民衆的なテーマの探求の中で黒人(文化)について歌う詩を多く生み出した。有名な「そのネグラ・フロー」(Essa negra Fulô, 1928)をはじめ、本稿で扱う『黒人詩集』の詩群<sup>4</sup>などがこ

---

<sup>1</sup> さまざまな研究でリーマは実はムラートであったと言われている (Brookshaw, 1983; Lopes, 2011; Nunes, 1976; Silva de Oliveira, 2021; Proença Filho, 2004)。

<sup>2</sup> 参照 : (Lima, 1997, pp. 23-24; Lopes, 2011, p. 398)。

<sup>3</sup> 南東部に対峙するように勃興した北東部地域主義は、北東部独自の文化や伝統を重視した。社会学者のジルベルト・フレイレ (Gilberto Freyre) の先導のもと、1926年に「地域主義宣言」(Manifesto Regionalista)を発出し、小説家のジョゼー・リンス・ド・ヘーゴ (José Lins do Rego)、グラシリアーノ・ハーモス (Graciliano Ramos) などが加わった (Bosi, 2022)。なお『黒人詩集』は1947年に初版が刊行されたが、序文はフレイレによるものである。

<sup>4</sup> 『黒人詩集』に収録された詩は、版によってその数が異なる。2016年の『黒人詩集：増補版』の選者ソウザ・アンドラージ (Souza Andrade)によれば、初版は39篇から構成され、そのうち16篇が新規の詩で、23篇は既刊の詩集などで既に発表されたものであった。本稿で具体的に扱う詩は新規の詩として加えられたうちの3篇である (Lima, 2016, p. 11)。

れに該当する<sup>5</sup>。

ただこれらの作品の黒人描写について今までの黒人文学研究の流れを追うと、批判が少なくないことがわかる。同研究分野が勃興した20世紀後半以降においてそれは、黒人をただテーマとして利用しただけの白人中心主義の文学と見なされることがある(Brookshaw, 1983; Duarte, 2014; Silva de Oliveira, 2021; Proença Filho, 2004)。「そのネグラ・フロー」は好例で、黒人のヒロインの官能性を強調する表現が、当時の人種偏見に基づくステレオタイプであると批判されている<sup>6</sup>。

この文脈でドゥアルチ(Duarte, 2014)は、『黒人詩集』の「視点」(o ponto de vista)に注目し分析を加えている。いわく、「視点」とは「著者の世界観とテキストで有効な公理的宇宙、つまり表現に存在する語彙の選択を支える一連の価値観を示す」<sup>7</sup>ものであるが<sup>8</sup>、同氏は本作のそれが「非常に他者的かつ外的で民俗的」(bem outro, externo e folclórico)<sup>9</sup>であると指摘している。これは本作における表現が黒人に對し「距離を置いている」(distanciada)<sup>10</sup>とする別の論者の言説とも重なる。これらの言説は、この詩集全体の基盤を成す“視点”が黒人と異なる人種・社会的立場に由来し、それによりここでは黒人がしばしば単なるフォークロアや同情の対象として描かれていると指摘しているのである。

ただそうした見方がある一方で、収録作の「黒人の女中」(Ancila Negra)は注目に値する。それは作者である詩人の幼少期の記憶をなぞった極めて私的な色合いの濃い作品で、1人の黒人の少女についての甘く、また苦い思い出が抒情的主体に深い感情を喚起している。

<sup>5</sup> 他にも『詩集』(Poemas, 1927)、『新詩集』(Poemas novos, 1928)、『選詩集』(Poemas escolhidos, 1932)のそれぞれに収録された諸作品がある。

<sup>6</sup> 詩ではフローと大邸宅の白人の主人の情事が描かれている。

<sup>7</sup> “O ponto de vista adotado indica a visão de mundo autoral e o universo axiológico vigente no texto, ou seja, o conjunto de valores que fundamentam as opções, até mesmo as vocabulares, presentes na representação.” (Duarte, 2014, p. 127).

<sup>8</sup> 本稿の詩や書籍、論文のポルトガル語引用は、筆者が和訳を当てた。

<sup>9</sup> 参照：(Duarte, 2014, p. 115)。

<sup>10</sup> 参照：(Proença Filho, 2004, p. 172)。

この詩の“視点”に限って見ると、『黒人詩集』全体の評価に関連するある疑問が生じる。この詩は作者の私的記憶に基づくため、確かに黒人と異なる立場による「他者的かつ外的」な“視点”を有しているかもしれない。だがその中で作者が実在した黒人に対し複雑な感情を向けている場合、その“視点”は果たして黒人に対して「距離を置」いた「民俗的」なものと言えるだろうか。

本稿は「黒人の女中」の黒人に対する“視点”が、これらの言説で指摘される特徴に部分的に合致しても、実際は異なる全体像を示すものであるという仮説を提示する。本稿はその検証のため、実際にこの詩の分析と解釈を行うものである。過程では詩の解釈を拡げるため、関連する『黒人詩集』の他の詩も分析し、詩集全体のテーマについても部分的に考察する。次章から早速見ていく。

## 2. 「黒人の女中」における感情の表出

ボジ (Bosi, 2016) が傑作 (*a obra-prima*) と評する<sup>11</sup> 「黒人の女中」は 30 の詩行から成り、幼少期の詩人の子守であったという実在の黒人の娘セリドーニア (*Celidônia*) についての記憶を歌っている。次は冒頭からの一部引用である。

Há ainda muita coisa a recalcar,  
Celidônia, ó linda moleca ioruba  
que embalou minha rede,  
me acompanhou para a escola,  
me contou histórias de bichos  
quando eu era pequeno,  
muito pequeno mesmo.<sup>12</sup>  
抑制すべきことがまだたくさんある、  
セリドーニア、美しいヨルバの娘よ  
彼女は私のハンモックを揺らし、  
学校に付き添い、  
動物たちの話をしてくれた

---

<sup>11</sup> 参照：(Bosi, 2016, p. 187)。

<sup>12</sup> 参照：(Lima, 1997)。

私の幼い頃、  
本当に幼かったあの頃に。

冒頭の7行では抒情的主体が幼少の頃を思い出し、少女セリドーニアが寝かしつけやおとぎ話をしてくれた過去を懐かしんでいる。個人的で自伝的とされる<sup>13</sup>この詩では、抒情的主体を通して詩人自身の記憶が歌われているとされる。つまりここには、詩人の極めて私的な過去の体験が表現されていると言える。

前半ではこの他に、彼女が抒情的主体にとって特別な存在であったことが懐古される（「あなたの黒い両手が私をなだめ、」 As tuas mãos negras me alisando,）（「おお黒く美しいムカーマよ、」 ó linda mucama negra,）<sup>14</sup>。だが、後半で想起される内容はトーンを一変させる。次も一部引用である。

Há muita coisa a recalcar e esquecer:  
o dia em que te afogaste,  
sem me avisar que ias morrer,  
negra fugida na morte,  
contadeira de histórias do teu reino,  
anjo negro degradado para sempre  
Celidônia, Celidônia, Celidônia!

Depois: nunca mais os signos do regresso.

Para sempre: tudo ficou como um sino ressoando.<sup>15</sup>

抑制すべきこと、忘れるべきことがたくさんある：  
死に行くと私に告げず、  
あなたが溺れたあの日のことを、  
死の中へ逃げる黒人女性、  
あなたの王国の語り部、  
永遠へと墮ちていく黒い天使

---

<sup>13</sup> 参照：(Ilari, 1988, p. 202)。

<sup>14</sup> 参照：(Lima, 1997)。

<sup>15</sup> 参照：(Lima, 1997)。

セリドーニア、セリドーニア、セリドーニア！

それから：もう帰ってくるきさしはなかった。  
永遠に：すべてが響き渡る鐘のように残った。

後半部はこの追憶の核心を明らかにする。それはセリドーニアの悲劇である。「黒い天使」に喩えられる少女は、抒情的主体の前から忽然と姿を消し戻ることはなかった。彼女は入水自殺したのだ。

抒情的主体がその名を連呼しているように、少女の喪失の記憶は深い感情を喚起していると言える。それはどのような感情か。

まずそれは何より、純粋な悲哀であろう。抒情的主体がセリドーニアに対して親愛の情を抱いていたことは前半の内容から明らかで、その情が深いものであったが故、彼女の自殺はその分だけ悲嘆を誘うものであったと想像できる。

だが、ここでの感情はさらに複雑なものであると考えられる。一部引用として挙げた前半と後半部のどちらにも、1行目に *recalcar* という動詞があることに注目したい。この動詞は「多くのこと」 (*muita coisa*) を目的語にしている。後半部において「忘れる」 (*esquecer*) と並置される動詞 *recalcar* とその目的語「多くのこと」の連なりは、イラーリ (Ilari, 1988) やカミーロ (Camilo, 2013) を参考にするならば、セリドーニアの記憶によって詩人が生涯、特に晩年にわたって強迫観念に苛まれていたという第三者の証言があることから、彼女の記憶を「抑制する」という意味で解釈するのがふさわしいと考えられる<sup>16</sup>。そうであれば、詩人の体験が仮託されたこの詩において、抒情的主体は少女の死にただ悲嘆しているのではなく、反芻される記憶に苛まれ、その制御に苦悩しているということになる。

この苦悩は並大抵ではない。というのもまずそれは、後半部の悲劇の記憶だけでなく、前半部の懐旧の念さえも「抑制」したいという衝

---

<sup>16</sup> イラーリ (1988) や同氏の見解に基づくカミーロ (2013) による動詞 *recalcar* の解釈の要所は、この動詞を詩人の心理的病と関連付けて論じている点にある。他方、米国のイスファハニ・ハモンドの研究 (Isfahani-Hammond, 2008) は、*reiterate* (繰り返す) と *repress* (抑圧する) の2つの英訳を当て、この動詞に解釈の幅を持たせている。

動を呼び起こしているからである(1行目の「抑制すべきことがまだたくさんある、」)。また詩中では教会の「鐘」が「永遠」を暗示しているが、これは少女の久遠の喪失を意味するとともに、この記憶と苦悩の永劫をも暗喩していると考えられる。抒情的主体は、苦悩をもたらすセリドーニアのあらゆる記憶の「抑制」と「忘却」の必要性を訴える一方で、この比喩表現で示唆するように、実際にはそれが永遠に不可能であることを悟っているようなのである。

ただそうなるとある疑問が湧く。何故この詩では、黒人の記憶にまつわる苦悩が恒久のものとして扱われているのだろうか。この詩で表現されているのは、いわばセリドーニアへの強い執着心である。しかしこのような内容は、本稿冒頭で見た『黒人詩集』への評価、つまり作品が黒人に對し「距離を置」き、「他者的かつ外的で民俗的な視点」を原動力とするものであるという指摘と相容れないように思われる。たった1人の黒人の死について忘れるということは、白人の詩人(≒抒情的主体)にとってそれほど困難なことだったのだろうか。

分析が滞る以上、ここで本稿の目的であるこの詩の“視点”的解明はできない。この新たな疑問を先に紐解き、詩の分析と解釈をさらに進める必要があるだろう。次章はまずその手掛かりから探る。

### 3. 『黒人詩集』のテーマとセリドーニアの死

「黒人の女中」では、セリドーニアについての記憶の忘却が不可能であり、抒情的主体が苦悩を永遠に抱えなければならないことが示唆されている。何故このようなことになるのだろうか。

この永遠の苦悩の謎を紐解く鍵は、実は引用した詩の後半部にある「死の中へ逃げる黒人女性」という一節にある。本章の狙いはまずこの一節の解釈なのだが、それにはさらに遠回りをして、『黒人詩集』の他の詩と、詩集全体のテーマの一部に言及する必要がある。

順を追って見ていきたい。まずセリドーニアを指す「死の中へ逃げる黒人女性」という表現からは、彼女が自殺によって自らが置かれたある境遇から“逃亡した”という文脈が捉えられるだろう。だが自殺をするほどの境遇とは一体どのようなものなのだろうか。

大雑把な結論から言えばそれは、白人の支配下という境遇であると考えられる。その根拠は、『黒人詩集』のテーマの一端に求められ

る。それは、奴隸制<sup>17</sup>に基づいて形成されたブラジル北東部の農園社会を舞台とする他の詩の描写に表出している。

テーマが表れる詩として2篇が挙げられる。「マリア・ジアンバ」(Maria Diamba)と「歴史」(História)である。これらの黒人描写を分析することで、そのテーマを浮き彫りにしてみよう。

「マリア・ジアンバ」は、白人を主人とする農園の大邸宅に仕える1人の黒人女性について歌っている。

Para não apanhar mais  
falou que sabia fazer bolos:  
virou cozinha.  
Foi outras coisas para que tinha jeito.  
Não falou mais:  
Viram que sabia fazer tudo,  
até molecas para a Casa-Grande.  
Depois falou só,  
só diante da ventania  
que ainda vem do Sudão;  
falou que queria fugir  
dos senhores e das judiarias deste mundo  
para o sumidouro.<sup>18</sup>  
もう殴られないために  
彼女はケーキを作ることができると言った：  
料理人になった。  
得意だったのは他のことだった。  
彼女はそれ以上話さなかつた：  
周囲は彼女が何でも揃えることができると思った、  
大邸宅の黒人の女の子たちでさえも。  
それからはスーダンからまだやってくる  
強風を前にしたときにだけ、  
彼女は言った；

---

<sup>17</sup> リーマが出生した1893年には既に奴隸制は廃止されている。

<sup>18</sup> 参照：(Lima, 1997)。

この世の支配者や虐待から  
排水溝へと  
逃れてしまいたいのだと言った。

詩は主人公であるマリア・ジアンバ=「彼女」の過去時制の発話(falou、言った)に焦点を当て、時系列で出来事を歌っている。最初の発話は、おそらく白人による暴力から逃れようとして口に出た、

「(私は)ケーキを作ることができる」というものであった(引用2行目)。その結果、邸宅内の料理人として働くようになった彼女は、それ以上の言葉は発しなかった(5行)。ただ暴力から逃れた先で再び、彼女は自身から人間的尊厳を奪う抑圧に直面した。彼女は、彼女と同様に白人に仕えることになる黒い肌の子どもを産むことを強いられたのである(「周囲は彼女が何でも揃えることができるようになつた、/大邸宅の黒人の女の女の子たちでさえも。」)。その後、彼女はごく限られた瞬間にしか話さなくなつた(10行)。自身をアフリカのルーツへとつなぐスーザンからの風を受けたときのみ、彼女は不条理な世界から逃避したいという真の願望を口にしたのである(13行)。

「マリア・ジアンバ」の短い詩行は、黒人への理不尽な暴力や強制という白人の抑圧の形を露わにしている。マリア・ジアンバの沈黙は、抑圧によって追い詰められた黒人の痛ましげな心理の表れとして読むことが可能だ。この詩はいわば、黒人が置かれた、逃れようにも逃れることのできない袋小路の状況を描写していると言えよう。

もう1つの詩「歴史」は明確にブラジルの奴隸制についての内容で、やはり黒人女性が主人公である。次は冒頭の10行である。

Era princesa.  
Um libata a adquiriu por um caco de espelho.  
Veo encangada para o litoral,  
arrastada pelos comboieiros.  
Peça muito boa: não faltava um dente  
e era mais bonita que qualquer inglesa.  
No tombadilho o capitão deflorou-a.  
Em nagô elevou a voz para Oxalá.  
Pôs-se a coçar-se porque ele não ouviu.

Navio guerreiro? não, navio tumbeiro.  
彼女は王女だった。  
ある集団が鏡の破片で彼女を買った。  
彼女はくびきをはめられ海岸へ、  
護送人に引きずられてやってきた。  
大層な上物だった：歯は一本も欠けておらず  
どのイギリス人女性よりも美しかった。  
甲板で船長が処女を奪った。  
彼女はヨルバ語でオシャラーに向かって声を張り上げた。  
彼に聞きいれられず、彼女は自分の体をかきむしった。  
戦士の船？　いいや、奴隸船だ。

詩はかつてアフリカのどこかで王女の身分であった「彼女」の物語を歌っている。彼女は美しく端正な身なりをしていて、奴隸商人にとって「大層な上物」であった。ただそのような出自も空しく、彼女はがらくた同然の鏡の破片と引き換えに黒人奴隸として売られた。新大陸への移送の途中、白人の船長による暴行によって彼女の心身は引き裂かれた。彼女が助けを求めヨルバ語で捧げた祈りは、ついぞオシャラー(アフリカ系宗教における神格オリシャの1つ)に聞き入れられることはなかったのである。

その後の筋書きでは、彼女はブラジルの大邸宅に入る。彼女は白人の男主人に仕えるが、主人に気に入られたことから夫人の嫉妬を買って虐げられることになる。

apaixonou o Sinhô,  
enciumou a Sinhá,  
apanhou, apanhou, apanhou,<sup>19</sup>  
主人を夢中にさせ、  
夫人の嫉妬を買って、  
殴られて、殴られて、殴られて、

このような境遇から彼女は森に逃亡するも、すぐに捕まってしま

---

<sup>19</sup> 参照：(Lima, 1997)。

う。彼女は最終的にオリシャの超常的な力を頼りに、再び祈りによって事態の好転を願う。

この「歴史」は内容としては1人の黒人奴隸の女性の物語を歌うものであるが、タイトルに示唆される通り、それは黒人集団の歴史に重ね合わされている。それ故、「彼女」が被った白人による抑圧は、不特定多数の黒人たちの体験としても語られていると言える。

実際、この詩の「彼女」に対する非人間的な扱いや度重なる暴力といった抑圧の形は、マリア・ジアンバが受けたものにも共通する。

「彼女」の場合、大邸宅から逃亡を図るもそれは失敗に終わり、最終的に自身の信仰に救いを求めるが、そのような展開が表わすのもまた、「マリア・ジアンバ」で見た物理的な逃亡の道が絶たれた袋小路の状況と近似している<sup>20</sup>。

これらのことから『黒人詩集』の詩の一部は、明らかに“抑圧された黒人”をテーマにしている。そこで露わになるのは白人の抑圧的支配下に置かれた黒人の厳しい境遇で、それは「黒人と白人の対立」(oposição entre negro e branco)<sup>21</sup>構造を前提としたものである。

そしてこのようなテーマは、同じ詩集に収録される「黒人の女中」にまさしく通底しているものであると考えられる。というのも、「死の中へ逃げる黒人女性」という表現が示す具体的な状況はこのテーマによって説明できるからだ。幼少期のリーマの子守であったとされるセリドーニアは、詩中で「ムカーマ」(mucama)と呼ばれるように、白人の農園主に仕える召使いであったのだろう。このことからは、詩中に明確な描写はないものの、彼女が“抑圧された黒人”的1人であり、マリア・ジアンバや「歴史」の「彼女」と同様、白人との対立構造の中で袋小路に追い込まれていた可能性が示唆される。「死の中へ逃げる」とは、彼女にとって自殺が、白人の抑圧的支配から逃れる唯一の手段であったことを示していると推定できるのだ。

では、この一節の解釈が指し示す状況が、どのように抒情的主体の

---

<sup>20</sup> アフリカ系宗教文化における呪術は「魔法」(a magia)であり、それを頼るということは「抵抗」(resistência)であるとイラーリは言う(Ilari, 1988, p. 203)。マリア・ジアンバの沈黙も然り、これらは彼女たちにできた非物理的な最大限の逃避行動として解釈が可能である。

<sup>21</sup> 参照：(Bosi, 2022, p. 484)。

苦悩の永遠の原因を明らかにする鍵となるのだろうか。次章では今一度「黒人の女中」の分析に戻りたい。

#### 4. 永遠の苦悩についての考察

第2章で見たように、抑制が困難なセリドーニアの死の記憶は抒情的主体に苦悩を喚起し、それは残酷にも永久のものとして詩中に暗喩されている。その原因は何なのだろうか。

まず前提として理解しておきたいのは、この詩が作者の体験に重ねられたものであるということである。詩には、第2章で触れたが、現実の詩人にとって彼女の記憶が強迫観念となっていたという状況が仮託されていると考えられる。このトラウマが生涯にわたるものであったからこそ、苦悩は永遠のものとして語られているという側面はあるだろう。

しかしこれは根本的な説明ではないと考えられる。本稿で問いたいのは、この現実の状況を含め、何が苦悩の永続性をもたらすのかである。前章で確認した詩集のテーマや、セリドーニアの置かれた境遇についての解釈を基にすれば、その要因が見えてくると思われる。

いくつかの条件は抒情的主体の立場を浮かび上がらせる。まず詩集の一部を成す“抑圧された黒人”というテーマは、「黒人と白人の対立」構造に立脚している。また前章では、黒人のセリドーニアが白人の抑圧によって袋小路に追い詰められ、結果的に自殺という逃避手段を選んだと解釈できると述べた。さらに詩人のリーマの記憶が歌われるこの詩において、抒情的主体は、当然リーマ自身のアイデンティティが重ねられている。これらの条件をつなぎ合わせれば、抒情的主体が黒人のセリドーニアの対立者である白人側の人間であり、彼女を追い詰め、自殺させた抑圧者の立場にあるということが示される。

そしてこれは、彼の苦悩の根底に横たわる意識を露わにする。彼(=詩人)は自分が白人の側であることで、セリドーニアへの抑圧とその自殺に対し、罪悪感を覚えていたと読み解くことができるのだ。

この人種的立場と罪の意識を踏まえれば、苦悩が何故永遠なのかがようやく見えてくる。それは端的に言えば、自分が白人であるということが、彼にとって所与の前提であり、生涯にわたる恒久の条件だか

らである。「白人の貴族の一員」<sup>22</sup>と呼称されるように、抒情的主体に重なる詩人の“白人性”はまさに搖るぎないものであった。その経歴<sup>23</sup>は、詩人が20世紀前半のブラジルにおいてまさに典型的な上流白人男性であり、その社会的立場がかなりの部分固定化していたことを示している。このことは彼に、苦悩の根底にある罪悪感の払拭を決して許さず、結果として苦悩は消失することなく永続するのである。

しかし、苦悩の永続性は別の要因によっても大きく影響を受けていると考えられる。

ボジ(2022)は詩人の「黒人詩と聖書・キリスト教詩の間に共通する特徴」として、「抑圧された人々の痛みを引き受けた友愛の息吹」があると指摘している<sup>24</sup>。創作後期におけるリーマは、「キリストにおける詩を復活させる」<sup>25</sup>ことをを目指し、カトリック的思想を前面に出した作品を残したことで知られる。そこにおける被抑圧者の「痛みを引き受けた友愛」の倫理的価値観が、詩人の黒人をテーマにした詩、つまり「黒人詩」に通底しているとボジは言うのだ。

もし詩人がこのような精神を「黒人の女中」に投影していたとするならばどうなるだろうか。作品を改めて解釈すると、「鐘」(第2章参照)は教会の鐘、つまり信仰の象徴として1人の黒人の死の記憶、そしてそれによる苦悩の永劫を告げていると理解できる。それはつまり、その苦悩の永遠が抒情的主体の宗教的倫理観によつてもたらされていることを意味するだろう。

抒情的主体の信仰心は、黒人の「痛みを引き受けた友愛」の意識を伴う。それは抒情的主体に対し、安易に苦悩の「抑制と忘却」の衝動に身を委ねることを許さない。何故なら彼は抑圧者としての根源的な罪を自覚しており、信仰の下に、抑圧に苦しんだ“友人”セリドニアの「痛み」を想像し、それを恒久の戒めとすることを自らに課して

---

<sup>22</sup> 参照：(Corrêa, 2003, p. 43)。

<sup>23</sup> リーマは医師や政治家、大学教授という職業経験を持つ知識人であった。たとえ註1で指摘したようにルーツが混血であったとしても、社会的には白人の特権を限りなく享受し、白人に近い立場にあったと言える。

<sup>24</sup> “um sopro de fraternidade, de assunção das dores do oprimido” (Bosi, 2022, p. 484).

<sup>25</sup> “restaurar a poesia em Cristo” (Bosi, 2022, p. 482).

いるからだ。この意識はいわば贖罪の意識と呼べるだろう。人種的立場による黒人への罪悪感が苦悩を永らえさせるならば、贖罪の意識はそれをさらに助長させる要因となる。

さらに言えば、この贖罪の意識は、第3章で見た「マリア・ジアンバ」や「歴史」の記述を支えているようにも考えられる。それはある種の使命感として、白人の支配と抑圧の過去を照らし、その暴力の歴史を詩的に記録することを詩人に促したのではないだろうか。

## 5. 結論と課題

前章までの分析に基づくと、本稿の最大の問題、つまり「黒人の女中」の“視点”についてはどのように考察できるだろうか。

冒頭の話をここで再度確認すれば、“視点”とは、作中における表現や語彙選択を決定づける作者の価値観や世界観を示すものである。それは、作者が描かれる主題に対しどのように感じ、また思考したかに影響され形成されるものであると言えよう。その意味で、前章で見た罪悪感や贖罪の意識は、まさに作者に由来する感情や思考の一部であり、この詩の“視点”を決定付ける要素であると言えよう。

この詩の“視点”は詩人リーマの記憶が仮託されているが故に、確かに白人の作者による「他者的かつ外的」なものであると推定される。しかし、罪悪感と贖罪の意識による永続的な苦悩を湛えるそれは、黒人を研究対象としてのみ見るような「民俗的」なものだとは考えにくい。また黒人たちに対し完全に「距離を置」いていると言うのも不自然で、それはむしろ、彼らを理解する必要性を感じ、どう寄り添えばいいかを思案するものであるように考えられる。

このような様相を示す“視点”は、改めて考えれば、白人が黒人に“隣接する視点”であると言えるだろう。それは隣人である黒人に対し「友愛」の心を持つが、それを以ってしても容易には贖うことのできない自らによる抑圧の歴史とその責を認め、彼らとの新たな関わり方を望むものであると捉えることができよう。

リーマの「黒人詩」に対し批判的傾向の強い黒人文学研究の分野も一枚岩ではなく、ダマセーノ(Damasceno, 2003)はそれを「黒人の文化や願望を客観的かつ真摯に研究した結果生まれたもので、黒人の

魂との一種の感傷的な同一化をもたらすものである」としている<sup>26</sup>。このような論は、本稿で示した“隣接する視点”的存在を補強するものと言える。

ただこの“視点”はあくまで『黒人詩集』、あるいはリーマの諸々の「黒人詩」における一面に過ぎないことは強調しておこう。冒頭の通り、詩人による黒人描写を広く見れば、それがしばしば黒人に対する偏見を露わにしているという指摘は少なくない。一部のリーマの詩は、「偏見と同情の間で揺れ動くものである」<sup>27</sup>と指摘されるように、黒人に寄り添うような素振りを見せても、無自覚に黒人の尊厳を軽んじる白人中心主義的な“視点”を持っていることがあり得る。

この詩集を始めとするリーマの「黒人詩」の“視点”は、20世紀の人種にまつわる社会思想や価値観がどのようなものであったかを、1つの具体的な形として映し出していると言える。それを歴史の一部として捉え、今日と比較することには一定の意義があるようと考えられる。今後もさらに別の角度からの検証が待たれるだろう。

なお本稿はリーマの社会的な“白人性”を強調しているが、ムラートである詩人の実際の人種的アイデンティティがどのようなものであったかは明らかにしていない。白人と黒人の混血という両義的な立場が内的葛藤を生み、詩人の罪悪感や“視点”的形成に影響している可能性も十分に考えられるため、このような観点での検証については筆者の今後の課題としていきたい。

## 参考文献

- Bosi, A. (2016). Jorge de Lima poeta em movimento (do "menino impossível" ao *Livro de sonetos*). *Estudos Avançados*, 30(86), 183-207.  
<https://doi.org/10.1590/S0103-40142016.00100012>
- Bosi, A. (2022). *História concisa da literatura brasileira*. Cultrix.
- Brookshaw, D. (1983). *Raça e cor na literatura brasileira*. Mercado Aberto.

---

<sup>26</sup> “A temática negra aqui apontada como característica é aquela resultante de estudos objetivos e sinceros sobre a cultura e aspiração do negro, trazendo uma como que identificação sentimental com a alma negra.” (Damasceno, 2003, p. 67).

<sup>27</sup> 参照：(Viana, 1987, p. 342)。

- Camilo, V. (2013). Jorge de Lima no contexto da poesia negra americana. *Estudos Avançados*, 27(77), 299-318. <https://doi.org/10.1590/S0103-40142013000100021>
- Corrêa, A. A. (2003). Jorge de Lima: poesia negra e a recepção crítica. *Terra Roxa e Outras Terras: Revista de Estudos Literários*, 3, 40-51. <https://doi.org/10.5433/1678-2054.2003v3p40>
- Damasceno, B. G. (2003). *Poesia negra no modernismo brasileiro*. Pontes.
- Duarte, E. A. (2014). Por um conceito de literatura afro-brasileira. *Rassegna Iberistica*, 37(102), 259-280. <https://doi.org/10.14277/2037-6588/29p>
- Ilari, R. (1988). Notas sobre "Os poemas negros" de Jorge de Lima. *Cadernos de Estudos Linguísticos*, 15, 199-206. <https://doi.org/10.20396/cel.v15i0.8636771>
- Isfahani-Hammond, A. (2008). *White Negritude: Race, Writing, and Brazilian Cultural Identity*. Palgrave Macmillan.
- Lima, J. de (1997). *Jorge de Lima. Poesia completa*. Nova Aguilar.
- Lima, J. de (2016). *Poemas negros: edição ampliada*. Alfaguara.
- Lopes, N. (2011). *Enciclopédia brasileira da diáspora africana* (4. ed.). Selo Negro Edições.
- Nunes, M. (1976). The Black Poetry of Jorge de Lima. *CLA Journal*, 19(3), 418-431. Acesso em 19 de 6 de 2025, disponível em <https://www.jstor.org/stable/44321626>
- Proença Filho, D. (2004). A trajetória do negro na literatura brasileira. *Estudos Avançados*, 18(50), 161-193. Acesso em 14 de 10 de 2021, disponível em <https://www.revistas.usp.br/eav/article/view/9980>
- Silva de Oliveira, L. H. (2021). *Negrismo: percursos e configurações em romances brasileiros do século XX (1928-1984)* (Kindle ed.). Belo Horizonte: Mazza Edições.
- Viana, D. M. (1987). O estatuto da ambigüidade: Jorge de Lima e a escravidão. *Revista de Letras*, 12(1/2), 341-356. Acesso em 15 de 5 de 2025, disponível em <http://www.repositorio.ufc.br/handle/riufc/17338>
- ジルベルト・フレイレ；鈴木茂訳. (2005). 大邸宅と奴隸小屋：ブラジルにおける家父長制家族の形成（上）. 日本経済評論社.

# O “ponto de vista adjacente” em *Poemas negros* de Jorge de Lima

Taketo Kikuchi

O poeta brasileiro Jorge de Lima é conhecido por ter publicado vários poemas sobre os povos e a cultura negra. *Poemas negros* (1947), uma coletânea de poemas com essa temática, é frequentemente alvo de críticas nos estudos da literatura afro-brasileira. Isso se deve ao fato de que o “ponto de vista” (Duarte, 2014) na obra é considerado derivado de valores brancos. No entanto, entre esses poemas, o poema «*Ancila Negra*» parece apresentar um aspecto excepcional a respeito dessa crítica, pois nele o sujeito lírico exprime sentimentos complexos e profundos em relação a uma mulher negra. Este artigo pretende identificar a forma desses sentimentos através da análise e interpretação do poema e, assim, sugerir a possibilidade da existência de outro aspecto do “ponto de vista” em *Poemas negros*. A partir do estado do sujeito lírico, que continua a sofrer com o sentimento de culpa pela sua posição racial e, também, com a consciência de expiação do pecado derivada da ética católica, podemos perceber um “ponto de vista adjacente” que se procura aproximar às pessoas negras e as compreender.